

物性研に着任して

鈴木 博之

今年の2月に、物性研究所のユニバーシティ・リサーチ・アドミニストレーター(URA)として特任研究員に着任しました鈴木博之と申します。今回は、この URA への着任記事として書かせて頂きます。従って研究履歴等の紹介は控えめです。

よく聞かれることですので、まずはその URA という職自体について説明する必要があると思います。以下、東大の URA 制度の基本方針を参照して、URA の業務についてご紹介します。この URA の業務自体は新しい概念ではなく、外部資金の公募情報の把握、最適な提供からの資金管理、そしてアウトリーチ活動など、現在研究者が行っている幅広い研究活動の中の「研究以外の活動に対する支援」が業務となります。つまり、その研究分野の専門性を有した人材がバックアップすることにより、研究者の研究以外の負担を軽減して、研究にできるだけ専念できる環境づくりに貢献する、というのが基本コンセプトです。どのような人材がこの URA という職についているかですが、私の周囲の状況で知る限りでは、私のような研究者、大学の先生やポスドクなど研究職から、JST や企業の中で研究マネジメントに近い仕事から移られた方、大使館の科学技術担当、それから秘書などと様々です。これは URA 業務自体の多様性と、所属する部局によって求められている主な業務が違うことに加えて、文科省の URA の整備事業も始まったことで急激に URA 職が増えたことも反映されております。待遇面も含めて、今後如何に URA を確立されていくかは、URA 当人が多様な業務の中からどのように仕事を選択するかも含めて、当分の間試行錯誤が続くと思われまます。では、物性研においては具体的にはどんなことをするかについては、公募時の内容を紹介させて頂きます。

- 物性研究所における新規プロジェクト、共同利用・共同研究、国際展開などを推進するために国内外の物性研究コミュニティとの情報交換や意見調整、会合の企画などを担当する。
- 外部研究資金に関する情報収集・分析を行い、教員を支援するとともに、所外連携の円滑化を図る。
- 広報、アウトリーチ活動、産学連携、国際外部評価などの活動を推進する。

と多様な業務ですが、当面は広報やアウトリーチ関係が主な活動になります。また、外部とのパイプ役という役回りでもあり、積極的に外に出て情報収集・調整活動等を行っていきたく思っております。ということですので、物性研内外において、私が色々関与させて頂くことが多いと思いますので宜しくお願い致します。また、是非、ご意見・ご指導も頂ければと思います。

さて、ここで改めて私自身の URA に至るまでの経歴紹介をさせて頂きます。祖父が金属職工で自宅にボール盤があったこともあり、小学校の時から「ものづくり」に興味を持ち、どうせつくるなら根本から、という単純な発想のもと、工学を通り越し理学にまで飛び、東北大学理学研究科に入学しました。この無垢な進路のイメージは学部時代のサッカーやバイトに明け暮れてゆくなか、すっかり記憶の彼方でしたが、たまたま最初に研究室訪問した磁気物理研究室が、試料作成の盛んな研究室であったことで、幸か不幸か昔に抱いたイメージ通りの結果となりました。研究室には鈴木孝先生という、ある意味不世出の先生もいらっしや、またスポーツ大会を総なめにするような同僚にも恵まれ、なかなか思い出深い院生生活でした。研究に関しては高木滋先生に師事し、ウラン系化合物の研究を行っておりました。修了後の 1996 年に、当時は科学技術庁の金属材料技術研究所、現在の独法化後は物質・材料研究機構(NIMS)に入所し、希土類系の純良単結晶育成や物性研究、及びハイブリッドマグネットの磁化測定のローカルコンタクトとして測定装置開発等も行ってまいりました。1999 年から 2 年間、フランス・グルノーブルのネール研究所と ESRF に客員研究員として滞在し、ネール研究所では故 Morin 博士のグループに、ESRF では ID20 磁気散乱グループに所属し、強相関係や多極子系の試料育成や物性測定、及び XMCD や ^3He 冷凍機の立ち上げと極低温の放射光実験を行ってまいりました。この外国での経験も今となっては URA の仕事に役立っています。特に、アウトリーチに関しては勉強になったことが多く、例えばフランスでの科学週間では、研究者たちが街の中心の公園で出前公開実験をしていたのはとても印象的でした。また科学週間以外でも、研究所に

はかなりの頻度で小学生から一般の方までが訪問しているのを見かけました。フランスの子供達はませていて大人顔負けの議論をしたがるので見ていて面白いのですが、研究者の方もアウトリーチが当然の責務だとしていることに、当時の私は感銘を受けました。

帰国して3年後の2004年から約1年半、内閣府の総合科学技術(CSTP)に出向しました。今年度から総合科学技術イノベーション会議(CSTI)と改称しましたが、言うまでも無く、このときの経験も今回のURA職への応募に繋がっています。この記事を読まれる若い人の中にも、そういうところで何をしているのか興味がある方もいらっしゃるかもしれないので、少し具体的に行った業務について紹介します。日本では5年に一度の科学技術基本計画を策定しますが、私は丁度策定のタイミングで出向し、「ナノテクノロジー・材料」分野における推進戦略の策定作業を行いました。この場合の策定作業としては、各省の担当者と調整活動を行いながら、会議の企画や運営を行い、その会議での議論内容をもとに執筆を行っていきます。また例年の作業となりますが、担当する分野の資源配分方針案、つまり科学技術関連の予算をどう配分するかについても各省と調整や会議等によって検討作業を行っていきます。その他には、国会等の答弁に関する資料作成もありますし、自民党議員への説明に対する資料準備なども行います。よく自民党本部にも出かけました。CSTPが一応日本の科学技術政策のトップに位置します。この会議の議長は総理大臣ですから。一応と言うのは、予算を握っているのはそれぞれの省ですので、あくまでも方針を述べるだけになります。それ故に各省との調整が必要となります。最近になって、CSTPも予算を持つようになりました。5年前のFIRSTから、今年度のSIPやImPACTです。科学技術政策担当大臣もいらっしゃいますが、勿論、彼らは理系の方ではありません。(鳩山元首相は博士をお持ちだったようですが)私も数度大臣に説明に伺ったことはありますが、科学技術としての重要なポイントを理解して頂くことは不可能です。このCSTP時代に行った海外調査で、フランスの原子力庁の元長官にお会いすることがあったのですが、その方は原子力の博士ももっていらっしゃいました。科学技術立国と称している日本もそのような時代が来ることを切に願う次第です。勿論、このような大臣以外にも、「有識者議員」と言っても、元大学の総長クラスの方もCSTPの構成員となり科学技術政策決定には重要な役割を担っています。いずれにしろ、専門性を有する研究者が出向して、科学技術政策の策定作業の下働きを行う必要があることは事実です。ご興味があれば、総合科学技術・イノベーション会議のHPを覗いてみて下さい。最初は見慣れない言葉が並んで理解しづらくかもしれませんが、日本の科学技術の中で自分がどんな位置にいるのか考えるには良い機会かと思います。

もう1点、URAに結びついた経緯としては、2008年から日本中性子科学会の行事幹事を4年間務め、その間に学会のアウトリーチとして市民公開講座の立ち上げを行ったことが挙げられます。アウトリーチは右肩上がりの予算の時代では、そのような努力は少なくとも熱心にはされておらず、そのつけが回って、ご存知の通り今は科学技術に対しても税金を使う説明責任が一層求められ、結果的に様々な形で研究当事者への研究以外の負担が大きくなっているのしかかっています。特に、物性物理の研究分野では、一般の人に理解しやすい形で役に立つことをアピールするのが難しい場合が多く、その難しさは市民公開講座を企画から運営まで行うとしみじみ感じます。「科学技術」という言葉は日本の中でも認知されていますが、ヨーロッパのように「サイエンス」が文化として根付いている(これは賛否両論あると思いますが)とは残念ながら言えない状況だと思います。

色々書き出すと長くなりますので、このあたりで終わりたいと思います。以前の物性研だよりで佐藤(卓)先生の記事にありましたが、これだけの物性物理の研究者の集団は世界的にも稀であり、ましては強磁場等の施設も整っているところはありません。これらのポテンシャルを活かして物性研の「サイエンス」が少しでも多く出せるように、研究者が研究に専念できる環境をつくるための裏方役として、また、物性研URAとして求められている所内外の風通し役として貢献できればと思います。URA室は3Fの所長室近くです。URA室と言っても私一人ですので、何かありましたら是非お気軽にお訪ね下さい。

最後に、次回の物性研だよりからURA担当記事としてインタビュー記事を連載する予定であります。乞うご期待。

